

80年といえば、学会としても相当長い歴史をもつものといえよう。しかし年月は知らぬ間に経つものであるから、学会はやがて100年、200年の

歴史をもつようになるであろう。日本数学会はどこまでも発展を続けることを希望する。(談)

50 年前 入 会 の こ ろ

—東京数学物理学会の思い出—

小 倉 金 之 助

私が日本数学会の前身東京数学物理学会にはいつたのは1907年(明治40年)6月で、ちょうど今から50年前であつた。そのころの私は東京に定住してはいなかったが、熱心な会員の一人であつたので、ここに入会から1911年の春仙台に住むまでの、4年間の思い出を語つて、80周年お祝いの言葉といたしたい。

私は東京大学数学科の出身ではないが、前に同大学の化学科に1年ほどいた関係上、物理の方には知っている先生たちが多く、会に出席してもあまり孤独感を抱かなかつた。それに物理の方は、田中館愛橘さんと長岡半太郎さんが、いつも陣頭に立つておられたのに、数学の方では、藤澤利喜太郎さんも坂井英太郎さんも例会には殆ど見えなかつた。吉江琢児さんはいつも、高木貞治さんと中川銓吉さんもよく見えておられた。

また発表論文の数からいえば、数学も物理の半分くらいはあつたのに、なぜか本会は物理が主で、数学が添え物のような感じが濃厚であつた。ただ物理の方では大学や天文台・気象台などに関係のない人たちの発表がほとんどなかつたのに、数学の方ではいくぶんか趣きを異にしていた。和算家を別としても、福澤三八さん、三上義夫さん、澤山勇三郎さんのような、大学には全く無関係な数学者も時々見えられた。

いま1907~1910年間の本会記事に載つた、数学と物理の論文数と著者数をあげてみよう。また

	1907	1908	1909	1910	
数 学	論文数	12	6	8	10
	著者数	7	4	4	6
物 理	論文数	20	27	10	15
	著者数	12	15	7	14

(紙数の制限上) 数学の論文だけに限つて、著者

名と論文数をあげると、次のようになる。

1907	遠藤利貞 (2)	川北朝鄰 (1)
	林 鶴一 (1)	中川銓吉 (4)
	刈屋他人次郎 (2)	内藤丈吉 (1)
	福澤三八 (1)	
1908	林 鶴一 (2)	吉江琢児 (1)
	三上義夫 (1)	小倉金之助 (2)
1909	林 鶴一 (2)	中川銓吉 (1)
	窪田忠彦 (2)	小倉金之助 (3)
1910	澤山勇三郎 (1)	林 鶴一 (2)
	三上義夫 (2)	貝原良介 (1)
	窪田忠彦 (1)	小倉金之助 (3)

論文の内容は、数論・代数が極めて少いし、解析も多くはなく、幾何をもつとも多い。代数や解析の不振は、すぐ前に活動された高木さんや樺正董さんなどの休憩と、藤原松三郎さんの留学にもよるだろう。そしてこれまで不振であつた幾何が、前面に出てきた時期であつた。(物理学者の側からも、貝原さんの三重直交等温面の研究が現われた)。中川さんが留学から帰られたことも、原因の一つであろう。

それに1907年は関孝和の200年忌に当たるためか、本会記事にも川北さん、遠藤さんの論文が載つたが、この期間はじつに和算史の転換期であつた。旧和算家の仕事が終つて、林さんの“和算における行列式”や、三上さんの“円理は関の発明か?”が、問題にされる時代が来たのである。

それなら当時の日本における主な数学論文は、本会記事だけで尽されたというべきであろうか? じつさい1908年にライプチヒで印刷中であつた三上さんの“Mathematical papers from the Far East”(1910)は例外としても、私たちは中川さんの非ユークリッド幾何学の論文(東京大学紀要, 1910)や、福澤三八さんの函数論の単行書

“Vier mathematische Abhandlungen” (東京, 1907) のほかに, “京都大学紀要” を忘れてはならないだろう. この期間の京大紀要には次の人々の数学論文が載っている.

河合十太郎 (1) 三輪桓一郎 (1)
吉川 實夫 (1) 和田 健雄 (2)
西内 貞吉 (1)

しかし, ごく大体から見れば, この1907~1910年の期間においては, 数学の国際的発表機関といえば, 本会記事の外にはなかつた, といつても, たいした言い過ぎではないだろう. そこに現われたのが, 1911年における東北数学雑誌の刊行であつた.

もう一つ記憶に残るのは, そのころ行われた本

会の通俗講演のことである. もつともこれは物理方面の話が多かつたが, ただ一つの異例として, 私が入会した1907年の12月5日に, ‘関先生二百年記念講演会’ というのが, 神田一ツ橋の高等商業学校大講堂で開かれた. 藤澤さんの座長で, 菊池大麓さん, 狩野亨吉さん, 林鶴一さんの講演があり, 聴講無料のためか, 非常な盛会であつた.

こんなことを回想しながら, また一方で, 東京数学会社創立80周年の今年こそは, 和文最初の西洋数学書柳河春三の“洋算用法”(1857)刊行の100周年に当ることなどを思い浮べると, いまさらながらわが国における数学の歩みについて, 深く反省せずにはおられなくなる. (1957. 7. 26)

数 学 会 の 思 い 出

辻 正 次

もう30何年も昔のことであるが, しかし何だか昨日の様にも思えて, 年月のたつことの早いのを痛感する次第であります. その頃は物理と一緒に, 日本数学物理学会といつて, 年会も物理と一緒に, 旧理科大学の大講堂(これは震災の時取りこわした)で開かれ, 数学の講演もごく小敷で大部分物理の講演であつた. 長岡先生が一番前の席に居て, 物理の講演に対して, 盛んに辛辣な批評を下して居られたのを記憶している. 後に数学が物理から分離して, 年会の講演を開く様になつたが, しかし講演数も少く, たしか20を越えなかつたようで, 代数も幾何も全部同じ室で講演も一日ですんでしまつた. 其頃は証明も全部黒板でやつたものである.

それから通俗講演が時々開かれ, 旧理科大学の大講堂で夜間に開催された. 学生の頃, 吉江先生の集合論の概要をきいた.

中村先生だつたか, 寺澤先生だつたかの提案で, 外国の雑誌の論文を証明もつけて邦文で出版する計画が実行され, 大変便利であつたが, いつの頃からか消えてなくなつたが, も一度復活してほしいものである.

これは数学会とは関係のないことであるが, 日本数学輯報の編集に多年関係した. これは数学以外他の自然科学の各分野に夫々輯報があり, 日本の学界の主な論文はこれに集中するという方針で医科などは全部これに主な論文を集中していたようである. 吉江先生が Chairman で, その下で御手伝いしたのであるが, 吉江先生は一々原稿の外国文の間違いをなおして, これはヒドイ独乙語だとこぼしておられた. 数学会の Journal が出るようになり, これに主な論文がのるようになって, 輯報の影が薄らいだようであるが, 永年関係した雑誌なので何か郷愁を感じる次第です.

入 会 当 時 の 想 い 出

末 綱 恕 一

数学会は此頃随分盛大になつて, 日本の数学の隆盛を示すものと, まことに慶賀に堪えない. 終

戦前までは数学物理学会の一部であつたが, 私が入会したのは関東大震災の前年で, 35年前(1922